
人生という名のギャルゲー

逆叫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生という名のギャルゲー

【Nコード】

N2566N

【作者名】

逆叫

【あらすじ】

高校に入学したものの帰宅部に所属して、膨大な時間を空費していた早田将一だったが、クラスメイトからの誘いでとある部活に途中参入することになる。そこで、先輩からゲームを借りた将一だったが、それが切欠となって、見えない渦に巻き込まれていく。

回顧 共生一（前書き）

元々、短編として書いてましたが、ありえない量になったので、こちらに長編として載せることにしました。

コンセプトは、作者自身が抱きたくない悩みです。結果、こんなタイトルになりましたが、別に、無条件なハーレムだとかが在るわけじゃないので、そこら辺は安心して下さい。

大分長い話になると思いますが、是非とも気長に読んでくれたら幸いです。

回顧 共生一

—

俺はもうすぐ十七になる男である。名前はきちんとある。早田将一という、如何にも日本男児といった名前がある。

部活動はしていない。成績は中の中。ほとんどの学校に一人はいるであろう、やけにパツとしない人物であると、自認している。

その部活については、吹奏楽に興味があつたのだが、人気なのか部室がパンク気味だったので、遠慮しておいた。

そんな視覚的な疲労感によって、帰宅部となってしまった俺であったが、勿論、家に帰ったところで暇で暇でしようがなかった。

去年、入学から一月ほど経ったある日、あまりの暇さに耐えかねて、近くの公園に向かった。小学生の頃、よく遊んでいた公園だった。中学に入ってから、めっきり立ち入っていなかったが、あまり風変わりしていなかった。

俺は風化したのかやけに白いベンチに腰かけ、ぼけっと人っ子一人居ない公園を眺めていた。別に、子供のインドア傾向が進んでいたから、とかそういうわけじゃなくて、単純に時間が遅かったからだろうと思う。街灯がやけに明るく点いたのを覚えている。

滑り台はやけに小さく見えた。すぐ脇が砂場だったので、よく上から飛び降りたりして、大目玉をくらっていたものだ。お陰で、高所恐怖症ではない。

ブランコはやけに低く見えた。大きく漕いで、思い切り靴を飛ばす遊びが流行っていた気がする。ある時、通りすがりの自転車の力ゴに入って、驚いた運転手が転倒して、思い切り怒られ、それ以来、禁止になったが、それでもちよくちよくやっていた。

ジャングルジムは、当時不人気な遊具だった。遊びつかれて帰ろうか、という夕方に、ちらとそれを見たら、夕陽に照った姿がとて

も寂しげで、「明日は遊んでやるか」と思ったことがあった。確か、その次の日は風邪をひいて寝ていた気がする。

見上げると、視界の端に葉っぱの群れが映った。この公園の象徴とも言える、ドでかい木である。といつても、このレベルだったら山に行けば林立しているだろう。夏は虫の宝庫だった。そこらの土を掘ればカブトムシの幼虫が居るし、少し木を昇れば蝉が三匹はいつもいた。早朝に行けばカブトムシもクワガタムシも居た。今もきつと居るだろうが。

そう、回想を繰り広げていたら、少しセンチメンタルな気分になってきた。

成績とか進路とか人間関係とか、これっぽっちも考える必要がなかったあの時の自分が、やけに立派なものに思えてきた。

さわさわと揺れた葉っぱの音が、俺の心をくすぐっているようだった。

寂しくなった。あの時、無理やりにも、あのパンクした音楽室に、身をねじ込んでおくべきだったと、後悔を始めた。

ふと座っているベンチに、一匹アリが歩いているのに気づいた。やや暗かったが少し大きめのアリだったから、気づけたのかも知れない。

アリといえば、よく巣に水を流し込んで遊んでいたものだ。ただ、その時、俺はそうとだけ思った。

そうとだけ思う暇しかなかったからだ。

ふいに、そのアリに影が落ち、誰かが座った。俺は驚いて身を反らす。

「……ああ」

そして、横顔を見てそんな声が出た。その声に反応するように、顔がこちらに向く。

「麻奈美か」

幼馴染である、本元麻奈美だった。家が近いだけあって、恐らく俺の認識では家族に匹敵するくらい馴染み深い。俺と違って頭が良

かったので、高校は勿論別々のところへ行っており、かれこれ一ヶ月ほど顔を合わせていなかっただろうか。

「こんなところで何してるの」

息を吐くように、淡々と麻奈美は言う。

「暇だったから、ちよつと散歩に」

「ふうん……」

怪訝な目つきでばやくと、正面に向き直った。

本人曰く切るのが面倒で伸ばしたという長い黒髪に、飄々とした横顔、凜とした顔立ちなのに、目はとても穏やか。相変わらずだった。

「お前はどうしたんだよ、こんな時間に」

「普通に、部活帰り」

しれつと言う彼女は、なるほど制服姿だ。夜によく溶けそうな色だった。妙に麻奈美に似合っていた気がした。

「部活かあ、何やってんの。やっぱり、吹部続けてるん？」

「まあね。他にやる事ないし」

「……だよな」

中学時代は、一緒に吹奏楽をやっていたのだが、同じやる事が思いつかない状態だったというのに、この差はやっぱり性格なんだろうな、と俺は割り切った。

「――将は？」

「俺は、入らなかったよ、何にも。なんか、吹部やたら人多かったし」

「そう」

やっぱりね、といわんばかりな口調だったが、別に俺は気にしなかった。そんなプライドを持っていたなら、こんな場所で黄昏てなんかいない。

「楽しんでる？」

「一応」

「そりゃ良かった」

基本、麻奈美との会話はこんな感じになる。万人に対してこんな感じだから、さぞかし彼女のトコの部員は苦勞していることだろう。ただあつさりとしても、決して理論的であつて感情的ではないというわけではない。

「もう高校入つて一ヶ月経つよな」

「そうね」

「……まあ、まだ早いと思うけど、好きな人とかできたりした？」

「……」

返事が無い。

俺は少し焦つた。

「え、ちよつと、何で黙るの」

「——居ないよ」

「……そうなのか」

そう言つて、俺はちらりと横顔をのぞいてみた。しかし、こつそりのぞいたはずだったのに、視線がぶつかつてしまう。

「そんな良いヤツがいないの」

「そ、そうかい」

そのまま見据えられたまま言われ、なんとなく俺は動揺してしまつた。

「将はどうなの」

「お、俺？ いないよ、まだそんな……」

「でしょ。そんなもんよ」

麻奈美は結論付けるように言つて、視線を正面に戻した。

空は完全に夜へと沈んでいて、もうすぐ暑い季節に移るというのに、まだまだ日没後の風は直に肌に沁みこむようだった。街灯が寂しく照らされる遊具が、日の出を待ち望んでいるかのように見える。

「ねえ」

「ん」

俺は夜空を仰ぎながら返事をした。

麻奈美は麻奈美で、至極単調にこんな質問をしてきた。

「私のことどう思ってた？」

俺は目を細めた。

「……どうって」

「私は将と友達で良かった。良いお父さんになりそうな、好青年ね」
「へ……」

「お人よしで踏ん切りがつかないけど、決めたことはちゃんとやるし、約束は破らないし、——こんな私でも構ってくれるし、良い意味で一方通行な感じ」

俺は面食らってしまった。麻奈美の、俺への客観意見なんて、生まれて初めて聞いた。褒め言葉ですらもらったことが指折るほどしかないのだから、驚くのも当然だと思いたい。

だが、面食らった理由はそればかりではない。

「……」

隣を見ると、また目が合った。えらく夜に似合う瞳をしている。

「俺も、もちろん、友達で良かった……、そうだな、勉強はできるわあっさりしてるが人に優しく出来るわ、大したヤツだと思ってた。ただ——、なんか強すぎる気がする」

「強すぎる？」

麻奈美は首をかしげた。

「全く、お前の弱いところをみた記憶が無いんだよ。そこが少し不安だった」

夜に溶ける瞳に不安の色が射した。その言葉の真意を探ってるような目だった。

「——どういうこと？」

「分からないなら、別にそれでも良いけどね……、楽しくやってるみたいだし」

「……そう」

そう言つと、麻奈美はすぐさまいつもの凜とした眼を取り戻した。俺は、それを見て思い切り上半身だけ背伸びをする。

「さてと……そろそろ帰ろうかな」

「うん」

麻奈美が頷き、すっと立ち上がった。俺もそれに続いたが、ついでに麻奈美が座っていたあたりのベンチを見やった。

アリは何事もなかったかのように歩き回っていた。

これが俺の言った、麻奈美の優しさ、だったのか。

回顧 門出の風景

二

それから数週間後、中間テストの結果に学校が一喜一憂していた頃であつたか。俺はといえば、中学程度の成績をなんとか維持してホツとしていた。

「なんだよ、そこそこ取れてるじゃねえか」

放課後の過疎している教室で、テスト結果の詳細の紙を眺めていると、ふいに後ろから声がかけられた。振り向くと、同じ中学であつた、清木が口元を歪めて覗き込んできていた。

「お前はどうかんだよ」

「ひでえよ、ダダ落ちだよ。早田のその、謎の適応力が欲しいわ……」

そう言つてため息を吐かれる。俺は、少し困つたが、真実を語ることにした。

「お前、何部入つたんだっけ」

「ん、テニスだよ。中学も入つてたからな」

「中学の時よりきついかな？」

「別にキツかないが、単純に練習量が増えたから、疲れやすくなつたかも」

「そうだろう。でも、俺は帰宅部なんだ」

「……そういうことか」

清木ははつきりと顔をしかめた。まあ、こいつの言うように、適応力があつたからかもしれないが。

「どっか入ろうと思わないのかよ」

清木は、不満そうな声で言いながら、俺の隣の席に腰を下ろした。「めちゃくちゃ暇なんだけどな、入りたいとは思わないね、今更つて気がする」

「まあ、実際今更だし。どこも大会近いし、忙しいだろうから、入ったところで放置喰らうだけかもな」

「だろ」

俺はテストの評価を鞆に放り込みながら言った。清木は、うーんと唸りながら頭を掻く。

「なんか、このまま早田に成績を置いてけぼりにされるのは不愉快だなあ……」

「なら、もっと頑張れよ。テスト期間だって、きちんとあつたわけだし——、って、お前今日部活あるんじゃないのか？」

「テスト期間なんて、毎日ゲーセンに……、ああ、部活は今日はオフだよ」

「何で」

「何でって……、そういう決まりだからだよ」

適当に休まないと死んじまうよ、と清木は肩をすくめてみせる。

俺は、毎日部活というものを休んでいるようなものだが、休み過ぎても死んでしまうような気がしてならなかった。しかしながら、今言ったような内情が邪魔をして、なかなか踏み出せないのが現実。

「おっと」

唐突に清木の携帯が鳴り出した。すぐさま取り出すと、手際よく着信を確認する。

「——お茶会のお知らせだ。んじゃ、俺は帰るぜ」

「お茶会という名のゲーセン巡りか……、ああ、じゃあな」

俺は呪詛の様に呟いて、そさくさと去っていったしまった背中を見送って、それから、閑散としてしまった教室を見回した。

やけに休みである部活が多い気がした。普段、大半の教室を占領している吹奏楽部の姿も見えないし、演劇部の発声練習も聞こえてこない。ひたすらに、静かだった。

というか、静か過ぎて気持ち悪かった。神経が稼動する音すら聞こえそうな程、静かだった。風が吹いて窓がガタガタ揺れる。

ただ、なんとなく家に帰る気がしなかった。どうせ暇になるだろ

うということもあつたが、単純に自転車を漕いで帰るのが気だるかつたからでもある。

突然、がらりと教室の扉が開いて、俺は飛び上がった。少し緊張した面持ちの担任だった。

「――何だ、早田か、さつさと帰れ」

「ええ、もう少しくらい駄目ですか」

「駄目もクソもあるか。さつさと帰れ。今日は、職員会議だから十六時以降生徒立ち入り禁止だぞ」

そうなのか。

「……話聞いてなかったな。とにかく、さつさと帰れ」

さつさと帰れをゲシュタルト崩壊するくらい聞かされ、俺は追いつ出されるように校舎を出た。

部活のささやかな喧騒を閉め出すとは、どれほど神経質な話をするのだろうか。俺は、のつぺりとした校舎の壁をじろじろと見ながら、駐輪場へと向かう。

せめて金さえあればな、と思う。

ゲーセンで現抜かしたり、都心にぶらぶらしにいたり、ゲームを時間を忘れるほどできるだろう。

しかし、金は無い。小遣い、という表現がぴったりなほどしか持ち合わせていない。

金が欲しければバイトでもすれば良いんだろうが。

「そうだよな……バイトしようかな……」

どうせありあまつている時間、無駄にはなるまい。社会勉強にもなるだろう。

駐輪場につく頃には、すっかりとその気になっていた。早速、今晚にでも相談してみようと思った。

「――あれ」

ポケットに手をつ突っ込んで、俺は首を傾げた。鍵が無い。ポケットをひっくり返し、鞆をかき回したものの、見つからない。

俺は嘆息した。

記憶を手繰り寄せると、携帯を取り出した弾みで出てしまったものを、そのまま机の中に突っ込んだような気がする。

「あー、教室入れないんだよなあ……」

もっと冷静なら忘れなかっただろうが、あの担任が急かしたばかりに。俺は、さっさと帰れ、という言葉が激しく嫌いになった。

しかし、暇には慣れているので、とにかく潰そうと考えた。歩いて帰るという手もあるが、流石にそんな気力は無い。

とりあえず、順当に近くのコンビニで立ち読みでもすることにした。

だが、ようやく辿りついたところで、並んでいる本はビニール包装がなされていて、立ち読みはできなかった。

金を使いたくなかった俺は、渋々と引き返してまた駐輪場へと戻ってきていた。すっかりとその頃には活力を削がれ、とにかく帰りたい一心でバイトのことなどすっかりと忘れてしまっていた。

さて、そのまま地べたに座り込んだ俺だったが、何時まで待てば校内に立ち入ることができるだろうか、という簡単な要素を見落としていた。

携帯で時刻を確認すると、既に十七時を回っている。

そうだ、会議といえども、学校内の職員が全員そちらに赴いているわけではあるまい。事務所には、どうせ暇でタバコをふかしている事務員の一人くらい居るだろう。

俺は立ち上がった、再び校舎内に向った。

内部は相変わらず切り取ったように静かだった。そう感じた俺は、他意も無いし別に見つからなければ許可を取る必要もあるまいと思っ、自分の教室へ直行した。

極力足音を立てないように教室へ入ると、机の中を覗く。果たして、そこに鍵があった。記憶違いではなかったらしく、俺は安堵して踵を返した。

下駄箱まで向う途中で少し耳を澄ますと、小さな話し声らしきものが会議室あたりから聞こえてきた。

「あの会議室本当に使われてるんだな……」

俺は誰もが一度は思うであろう事を考えながら、階段を下りる。上履きがパタパタと音を鳴らす。

視界の端に下駄箱が現れたとき、俺は立ち止まった。

しかし、上履きが床を鳴らす音は止まらない。穏やかな空間を波打つように、その足音は明瞭に俺の耳へと響いてきた。

俺は努めて何も考えないよう、また階段を下り始めた。――大丈夫。悪意は無かった。分別のある人なら分かってくれるはずだ。

気配に気づいていない振りをして、逃げ込むように下駄箱の前に歩いていく。

ローファアを引き抜き、上履きを突っ込み、そしてローファアを地面に置いた。

この時、さつさと履いてさつさと校舎から出て行けば、その時は俺の勝ちだった。何も考えずに、ただ家に帰ることだけを念頭において、尾が残す跡を一切気にしなければ、俺は、この時は勝ち、だった。

しかし、俺はローファアを履いた後、あの俺以外の足音の正体を、微塵ではあるが気にして、一瞬、盗み見るように振り向いた。

目が合ってしまった。それは、数週前に麻奈美と語ったあの日を彷彿とさせるような、刹那の会話のようで。

冷静なら、そんな風に思っただろうに。

俺は逃げた。

すぐさま昇降口の戸を乱暴に開けて、駆け出した。

地を蹴り殺す勢いで走って、駐輪場に向う。

しかしながら、家と学校を往復するだけの毎日、体がついて来れずに自転車にたどり着く頃には、もう既に息が上がってしまっていた。

ようやく手に入れた鍵で開錠し、支えから自転車を引きずり出すとすぐ跨り、走り出す。

ここまで来れば大丈夫だろう、と俺は安堵して、そのままハンド

ルを校門へと向かせた。

ちらりと、先ほど出てきた昇降口を盗み見すると、誰かが居たので、今度こそ目を合わせぬように、前を見据えた。

回顧 共生二

三

それから月日は駆け巡る。

俺は、特に部活にもバイトにも就かないまま、一学期を漠然と過ごした。テストも表情の変えようが無い結果で通過し、通知表も進んで見せたくも無いが拒絶するほど見せたくも無いほどではない結果だった。

最早恒例らしい、全校生徒閉め出し職員会議もあったが、今度こそ無事に俺は帰宅した。

「コンクールっていつあるん？」

このままいくと、今年の夏は人生でもっとも暇なものになる。

俺はそんな気がして、麻奈美にそう訊ねてみた。忙くてなかなか会えず、メールでのやり取りだった。

「七月の末」

「暇だから聴きに行っても良い？」

「どうぞ」

中学の頃は、コンクールを聴きに来る一般の人は、どれほど暇なのだろうかと思ったこともあったのだが、それほど暇になるとは、俺も思わなかった。

夏休みが筋トレづくしの日々になるのは流石に嫌なので、ちよくちよく音楽鑑賞でも考えようかと考え、俺はそのほか、同輩だった連中に連絡をつけて、色々和讯いてみた。定期演奏会をするところもあれば、コンクールに情を傾けているところもある。

それらの日付をマークしていったら、五分の一ほど予定が埋まった。

それぞれに劳いのコメントをせせこせこと送っていると、今度はクラス委員長からメールが来た。

「早田君は、夏休み暇だよな」

「暇です」

「文化祭の準備、めちゃくちゃ手伝ってよね（絵文字）」

ちなみに、初めて高校でメルアドを交換したのは彼女だったりする。

かくして、俺の高一の夏はなんとか暇すぎてムキムキになるのを避けられそうだった。ちなみに、バイトの話は、すっかりどっかに行っていた。

夏休み突入二日目くらいに、早速どこかの定期演奏会があった。

「こんな時期にやってコンクールは大丈夫なのか」とそこに所属しているヤツに訊いてみたら、「同じ曲ばかりやってたら飽きるだろう」と言われて、納得した気がする。

上手だった。それは、高校生ならではのノリの賜物だったのかも知れないが。

七月の末は、麻奈美のトコが出るコンクールの日だった。ちなみに、他の同輩も同じにやるところが幾つかあったので、出演前に顔をあわせて懐かしがったりした。

麻奈美はクラリネットを吹いていた。そういや、全く教えてくれなかったな、と思いつつも、なんとなく型にはまったその姿を、俺は席に深く身体を埋めて見ていた。

結果は、銀賞だった。

かなり気合を据えて上位大会を目指していただけあって、その衝撃はかなりのものだったのだろう。麻奈美のトコの部員は、大半が涙を見せていた。

帰りは二人で帰った。もうすっかり日が暮れていた。

「……残念だったな」

電車に揺られながら、俺はそういった。

「勝負は時の運なもの」

しかしながら、麻奈美は涙など見せず、相変わらずあっさりとしていた。髪はあれから更に伸びたのであろうか、肩甲骨の下まで達

している。

「悲しくないのか」

「悲しいよ。でも、皆で悲しみたくないの」

「……なんで」

「私は優しい言葉なんて、上手く言えないから」

さらりと言つてのけていたが、そういう横顔はとても悲しそうに見えた。

程なく電車から降りて、星がよく見える空の下、帰路を歩く。

「将って、夏休み暇じゃないの」

「暇過ぎて、暇が何だか分からなくなるくらい暇」

「——そう」

「まー、だから結構、部活やってた頃の奴らの演奏会だとかコンクール見に行こうかな、って思ってるんだよ」

「……私も、もう、暇になっちゃった」

「え？」

遠くで電車が張り切って通り過ぎるけたたましい音が鳴っている。その音にすらかき消されそうな声だったので、俺は思わず大きく聞き返してしまった。

それきり麻奈美は黙ってしまった。この、すぐきまずい雰囲気を自分で作ってしまったので、俺はなんともいうこともできず、そのまま、とぼとぼと二人で歩く。

十分ほど歩いて数ヶ月か前に、肩を並べて座ったベンチがある公園が見えてきた。

そこで、ふいにくい、と袖を引っ張られた。顔を見ると、少し決まりが悪そうな顔で、ただそれだけで何も言わなかった。

俺は頷いた。

前と同じベンチに腰を下ろす。そのままタイムスリップしたかのように、あの時と変わらなかった。全く同じだった。

「……」

しかし、心境は全く違った。

俺は不安だった。何をどうすればいいのかわからない。心のささくれを剥ぐかのように、混沌が渦を巻いている。

だが、これ以上考えていても、どうしようもない気がした。

俺は、ひどく重い口を、力任せに開いて言った。

「——あんときここで言っただよね」

「……？」

驚いた顔で麻奈美が俺を見た。

「強すぎるってさ」

「……別に、強くなんで、ないよ」

小学生の頃、悪戯を仕掛けていじけさせてしまったことが何度もある。その和解を持ちかけた時、特有の不貞腐れた声だった。

俺は、おどけて言ってみせる。

「素直じゃないんだから」

「——素直だから」

「だったら笑ってくれよ」

「え……」

麻奈美は絶句したまま、俺を見つめた。俺は、呆然としたその額を、指で突付いてやる。

「お顔が怖いよ。俺と何年一緒だと思ってるんだよ、辛いこと溜め込んでることくらい分かるわ」

「……べ、別に……」

目を逸らされる。

俺は少し腹が立って、続く言葉を吐き出しかけたが、寸前の所で呑みこんでしまった。

「——……」

「……？」

麻奈美が、窺うように俺の瞳を覗き込んできた。何故か、俺はすっと視線を明後日に向けてしまう。

「あの、いやだから……」

困った。

言葉のプールに、この状況に言うべき言葉が浮かんでいない。見つけられない。

たまたま目に入った月が、やけに大きく見え、黒々とした夜空がやけに広く感じられる。木を揺らす風が運ぶ温い空気が、俺から理性を運び去っているようだった。

「……ああ……」

俺は、どうしようもなく、また目を合わせた。

麻奈美は驚いたように目を睜っていた。恐らくは、生まれて初めて見た表情だった。

「……」

「……」

視線は今度こそがちりと固定されてしまった。逸らしたら、人間として駄目な気がしたのだ。

俺待ちなんだよ。

今まで、俺の知らないところで辛苦を耐え続けて来て、しかし、結果はついてこなくて、疲れも大分溜まってる筈だし、ストレスも心労も随分なものだろうが、それでも、待ってる。

弱い、と思った。

弱すぎた。

——ふいに、麻奈美が指を伸ばしてきた。俺は反応できないまま、それをぼんやりと眺めていたが、やがて、それが頬に触れる。

それからさつと撫でると、俺の目の前に突き出してきた。

「……ええ……？」

濡れていた。

「ええ、ええ……！？」

俺は反射的に、手を顔にあてた。湿っていた。そういえば、目頭が熱かった。油断すると、喉から何かが漏れてきそうだ。

俺が泣いていた。

たった、人一人の内情を想像するだけで泣いてしまうとは、阿呆みたいに甘いな、と思ったが、所詮、それは冷静ぶった自分の意地

つ張りな部分だったに違いない。

色々と混沌とした感情を抱える中で、ただ本能的に、俺は麻奈美を見つめていた。

我を忘れたぼかんとした顔で、ただ俺を見据えており、澄んで飄然とした瞳が、段々と曇っていくのが分かる。

最高に情けなかった。このまま、地球が割れて、人類が滅びても構わないとさえ思った。

しかし――、曇っていったのは、俺の眼じゃなかった。

麻奈美の眼から、つうつと、綺麗に涙が流れていった。

「……バカね……」

そのしわくちなな声を聞いて、俺は周りが凍りついたかのように静かなことに気づいた。この公園に二人残して、全て闇に消えてしまったかのように。

俺は、ぼんやりとその美麗な泣き顔を眺めていたが、徐々に崩れていった。

「……正直言うと……、悔しいとか悲しいとか無いの……、なんか……、大変だったけどさ……、悔しいんだけどさ……」

「うん」

「でも……、どうして、こんなに悲しいのかな……」

そついうと、麻奈美は顔を伏せた。

そして、ゆっくりと身を寄せてきて、腕を俺の胴に絡め、染み込む様に抱きついてきた。

俺も、何も考えていなかった。ただ、ひたすら、顔を埋めて泣いている麻奈美を、撫で続けていた。

数ヶ月前に言った弱さとは、これで良いのか、と問われれば分からない。むしろ違う色の方が強いのだが、俺はこれでよかった。

それから数十分間、二人でさめざめと泣いた。やがて、落ち着いた後、至極簡単な挨拶だけして、別れた。

これが、俺の高一の夏の淡い思い出。ひたすら鮮明に、克明に記憶に刻まれている、幼馴染との、唯一の淡い思い出――。

回顧 共生二（後書き）

ストックここまで、以後、不定期更新。

回顧 船出一

四

それから半月は、のんびりと過ごした。

他の元部員達のコンクールや演奏会をちよくちよく見に行き、またそのよしみでカラオケなどに行ったりして、大分部活動から乖離しつつも充実した夏休みを送っていたのだ。

また、麻奈美の部活が休みの日などは、一緒に出かけたりもした。その日は、友達の誕生日プレゼントを買いたいということで、都心に買い物に行った。

写真立てなんて、大分ピンポイントなものを買ったな、と俺は思ったが、本人曰く、さりげなく欲しい物を訊きだしたらしい。麻奈美がさりげなくというのだから、恐らく相手は全く勘付いていないだろう。それほど、巧緻な仕事をする奴だ。

帰りの電車、俺はぼんやりと中吊りを眺めていたが、ふと麻奈美の顔を見ると、前置きも何もなく、突然言われた。

「ねえ将、少し太った？」

「え!？」

思わず頬に手をやった。

「なんとなく去年の写真見てたけど、なんか、ふつくらしたよ」

「……マジか……」

「やっぱり、部活やってないからじゃないの」

「……文化部でも結構体力使うんだな……」

とはいっても、月日とは意外と濃いもので、あの頃の喧騒を覚えていない。

俺は、結構な衝撃と共に帰宅し、体重を量ってみたのだが、四キロほど増えていた。

想像以上に太った。

鏡を見たが、それ程外見に変化は無いように思えるが、麻奈美が言っていた様に、去年の写真を引っ張り出して比べてみると、成る程、少しふっくらした。そういう表現しかできない。

自分の部屋に帰ってベッドに倒れこむと、頬の肉を引っ張った。痛かった。

これなら、暇を持て余して筋トレしまくって、ムキムキになっていた方がマシだったか、と思った直後、よく考えたらそんな忍耐力なんて持ち合わせていなかったことに気づいた。

結局、どういう経路を踏んでも、俺の場合はこういう夏休みになるのだ。

痩せなければ、と凄いい気になって、すぐさまベッドから飛び降りて、近所にジョギングに出かけてきた。普通の私服姿で走っていたので、ひどく注目を浴びて、赤面して帰ってくる羽目になったが。

くたくたになって、自分の部屋に戻ると、携帯の着信ランプが点いていた。

麻奈美かと思ったが、高校からの連絡だった。

「暇だったら、ホントに明日手伝いに来てね【ダッシュ】」

クラス委員長だった。そういうえば、高校のことには全くの無頓着だった。

どうせ、次の日は暇だったし、俺はその要求に応えることにした。制服が必要なことを思い出し親に言つと、すぐさまクリーニングから受け取って、小言と一緒にビニールをつけばなしで渡してきた。次の日はまったり起きて、学校に出かけた。

めっちゃくちゃ暑いし、日が程よく昇った時間帯なので道は混んでるし、着く頃には大分テンションが下がってしまっていた。

駐輪場に自転車を置くと、額に滲む汗を拭いながら、校舎へと向かう。

学校は最後に見たときより、ささやかだが文化祭仕様になりつつあった。所々にまだハリボテの段階ではあるが様々なオブジェクトがあり、木材を担いだ生徒がばたばたと走り回っている。上の方が

らは、吹奏楽部の合奏が聴こえてくる。

下駄箱に靴を突っ込み、階段を上がると、踊り場でクラス委員長と会った。

「あ、早田君」

逃げた飼猫が見つかったかのように嬉しそうに言われる。

クラス委員長と散々呼んできたが、名前は国橋祥子という。名前の通り、真面目な眼鏡女子である。ただ、一口に真面目というのは語弊がちらほらと散見されるが。

「おはよう」

俺は、丁寧に挨拶をしたが、国橋には苦い顔をされた。

「もう十一時なんですけど。どうせ来るならもっと早く来てよ」

「ごめんごめん、朝起きれなくてね」

「まあ、あんまし期待してなかったから良いんだけどね。そんなことより、今暇？」

「暇だから来た」

「それじゃあ、ちょっと着いてきて」

そう言って国橋は、俺がやっとこさ上ってきた階段を駆け下りていく。俺も言われたとおりに、ついていった。

「え……、また外出るの……」

下駄箱から靴を取り出す国橋を見て、俺はげんなりした声を出した。

「買出しだよ。あたし一人じゃ運べないかも知れないから」

「……だったら、もう一人連れてくれば良かったのに」

「——そうか、今日初めて来たんだっけ」

校舎から出て、むわっとした太陽光に目を細めたところで、国橋が振り返って言った。

「ああ、夏休みでは初めて来たな……」

「めっちゃ人手不足なのよね」

「——そうなのか」

俺は反射的に罪悪感を抱いた。思い返すと、大分奔放に過ごして

いた。そういえば、宿題全然やってないな。確か読書感想文もあった筈だ。あれ、苦手なんだよな――。

夏の負の要素を次々と思い出して、俺の気分は暗澹とし始めた。「なんか、悪いな、全然来れなくって」

「え、大丈夫、人手不足は今日限定だから」

「え？」

「だって、お盆でしょ。皆こぞって帰省してたりしてて、今日はそれが特に集中してるの」

「……なんでい」

だから、俺が来ることを期待してなかったのか。あんなメールを送っておいで。

消沈した気分から脱出したものの、俺はなんとも不貞腐れた気分になった。

まあ、実際暇だったからいいが。

さて、駐輪場に行くのかと思いきや、迷わず校門に歩いていくのを見て、俺は驚いて声を上げた。

「え、歩き？」

「当たり前じゃん。自転車で行ったら、帰りコケると思うよ」
「……」

どれだけ買う積もりなんだ。

俺は、激しく帰りたくなったが、もうここまで来てしまったら仕方が無いと、とぼとぼ国橋についていった。

それから、かなり手伝わされる羽目となる。もとより、そのつもりで行ったんだが、それでも予想以上の労働量だった。

クラスの出し物は、迷路をやるらしいが、立体的で複雑なものにする積もりらしい。しかも、単純にゴールを目指すものではなく、物探しというのだから、相当な難度になるだろう。

それに比例して、製作も難しいものになるのだから、国橋は毎日学校に出てきて、帰る時には既に真っ暗になっているらしい。

俺はその話を聞いて、またも少し気分がどんよりし始めた。

「別にそんな苦じゃないよ。趣味みたいなもんさ、君だって寝たりするでしょ？」

「寝るのは趣味じゃないけど」

教室には、数人クラスメイトが居たが、それも片手で数えられるほどだった。しかも、全員女子。

「別に無気力なんじゃなくて、部活で忙しいんだよ。だって、部活入ってないの早田君くらいだし」

俺が何かを思う前に、そんな釘を刺された。まあ、お盆と重なれば、このくらいになるか。

そう考えてから、手に持った荷物を下ろした。

すごい音を起こして荷物が床に叩きつけられて、皆、ビックリして俺を見た。

凄まじい量だった。これを、文化部の貧弱男に持たせるなんて、狂気の沙汰だ。

しかしなんとまあ、今までサボっていた贖罪が出来た様で、気が幾分か軽くなった。

それから、作業が始まる。

設計図を見せてもらったが、いまいち理解できなかった。もとより、自分が分かればいい、というので、国橋以外解読できないらしいが。

ダンボールを加工して取り付けたり、木材で骨組みを組んだり、装飾用の小物を作ったり。

「ちよつと！ 糊ついた手で、これ触ったでしょ！」
怒られて。

「ねえ、これちよつと長さが違うんだけど……」
間違えて。

「もうちよつと綺麗に作れない？」
却下されて。

それでも、何とか作業を進めることが出来た。
「頑張ったねー」

そんな労いをもらったのは、やや日が暮れかけた午後七時ほど。
疲れて教壇に凭れていた俺の目前に、缶ジュースが差し出された。
「おごり」

「あ、ありがと……」

「えへへー」

俺は、何も考えずにそれを受け取ると、震える指でタブを起こして開け、口をつける。サイダーだった。

「よつと」

弾ける炭酸に乗った甘みを飲んでいると、隣に誰かが座った。そして、俺と同じように缶ジュースを開ける。

「誰かと思えば、大海か……」

「うん」

ちびちびとサイダーを口に含んでは飲み、頷いた。

彼女は大海皆。隣の席の女子である。

それに加えて、吹奏楽部に見学しに行き、すぐさま一緒にリターンをかました仲でもある。

「あんまり、大人数は好きじゃないんだよねー」

と、言っていた。俺と同様に、中学では吹部だったらしいが、そういう理由で高校で吹奏楽をするのを断念していた。余談だが、聞くと、中学時代の吹奏楽は合計で十五人しかいなかったらしい。

そついうつながりもあって、大海とは自然と話すようになって、会話に困らない程度の仲になっていた。

「炭酸強いね、これ」

「そつでもないけど」

俺は、あっさりと全て飲み干すと、横目で大海を見た。

肩からのぞかせたサイドテールに、大きな目、愛嬌のある顔立ちな、おとなしそうな容姿だが、実際、そこまでおとなしくない、そつはいつても、そこまでアグレッシブな訳ではない、バランスのとれた性格の人だった。

「何か、早田君が頑張つてるとこ初めて見た気がする」

「頑張る場があんまり無いからね」

「へえー。部活やってないの？」

「吹部があれだったから、なんか萎えちゃって、今は家で暇を潰す部活やってる」

「……なんか楽しそうだね」

大海は少し気まずそうに言った。

教室には誰も居なかった。皆、用事などでそれぞれぱらぱらと帰っていき、国橋でさえ、用があるといったたさつき帰ったばかりだ。

外は、ようやく暗くなり始めてきたところだった。

「そっぴや、大海は部活入ったん？」

「入ったよ。暇なのやだもん」

「へえ、何部？」

「……」

——黙ってしまった。

まさか地雷を踏んだわけではあるまい、と大海を見ると、ぽかんとした顔で大海も俺を見てきて、面食らってしまった。

それから、急に納得したような顔になって、こんなことを言った。

「ねえ、うちの部活入らない？」

「え……」

俺は言葉に詰まった。

実のところ、吹奏楽部に入らなかったことを後悔していた自分は居たし、部活に入りたいと心の隅で思っていた自分がいたが、ここまでハッキリと機会を与えられるとは思っていなかったので、すぐには返事ができなかった。

「……駄目？」

大海が首をかしげて訊ねてきたのを切欠に、俺はハツとする。

「——駄目じゃないけど、何部？ それによるんだけど」

「音楽部」

その名を聞いて、俺の頭上にクエスチョンマークが出た。

「……えっと、どんな部活？」
疑問にしまった時点で、俺の残りの高校ライフの舵は確定した。

回顧 船出二

五

「頭数が少なくて下手ついで貧乳が多い部活だよ」

「いや別にそんなことを訊いてるんで無くてね」

俺たちは帰る準備をしていたところだった。

俺が内容を質問した直後に、担任から恒例のさっさと帰れ、という言葉を仰せつかったので、慌てて始めたのだ。

「やってるのは合唱だよ」

「合唱」

俺はオウム返しに言って、大海は頷いた。

「合唱祭くらい、中学の頃あったでしょ？」

荷物を纏め終わると、教室を出て引き戸を閉めて、鍵をかける。

この鍵を、また職員室まで返しにいかねばならない。

「あつたけど、大分扱き使われた気がする。吹部だったからね」

話しながら、職員室へと向かった。

「それ、楽しかった？」

「面倒だったかな。基本的に、行事への熱意は大したことない学校だったから」

「そうなんだ……」

大海は、残念そうに少しうなだれた。

何故か学校に残って良いのは十九時までと決められており、その時刻を過ぎた校舎内はひっそりとしていたが、職員室だけはまだまだ活気があった。

「失礼しまーす」

「失礼します……」

大海は間延びした挨拶をして入っていくと、慣れているのか鍵を迷わずに返して、さっさと職員室を後にした。

「失礼しましたー」

「失礼しました……」

俺は立ち位置に困って、結局挨拶するだけの存在になってしまった。

「でも、音楽部なんてあったんだ、全然知らなかった」

下駄箱に行く途中で、俺はそう言った。それを聞いた大海はむすくれた顔をする。

「新人生歓迎雑誌に載ってたじゃんー。さては、興味ゼロだったでしょ」

「……そういえば、そんなのあったね」

確か、家に帰ってすぐ本棚の肥やしになった気がする。

「それ読んで、うちは興味持って行ってみたら、なかなか面白そうだったから入ったの」

「へえ……」

下駄箱はひっそりとしていて、歩く音がいちいち響いて不気味だった。俺たちは逃げるように外へ出た。夜のむわっとした空気に、大海が反応する。

「うわー……気持ち悪い」

「毎日こんなもんじゃない」

俺はそっけなく言って、駐輪場へ向かった。すると慌てて大海は追いかけてきた。

「ちよっと待ってよー」

「あれ、チャリ通だったんだ」

「うん、かなり近いよ、ここから十分くらいで着く」

「いいなあ」

俺はどう頑張っても三十分はかかる。羨ましい限りだ。

駐輪場に着くと、それぞれ真っ直ぐ自分の自転車へと向かった。

俺は、定位置している鞆の小ポケットから鍵を取り出すと、開錠する。

鞆をカゴに放り込んで振り向くと、もう既に自転車を押した大海

が居た。

「で、答えはどうなの？」

大海は甘い微笑を浮かべて、首を傾げて言った。俺は視線を逸らして、頭を掻きながら応える。

「ああ……、分かんない。そんなすぐ決断できるようなことじゃないし」

「そうだよー。まあ、今の時期に入ってきてても、多分大会に間に合わないから、答えは二学期が始まってからでも良いよ」

「……ん」

俺は曖昧な返事だけをしておいた。

同じチャリ通でも、方向は正反对らしくて、校門を出たら大海とはすぐに別れた。汗がじんわりと滲みこんだTシャツで夜風を受けながら、俺は帰路を急いだ。

この日、かねてから思っていた、部活に入るといいう機会が具体的になった。

このとき、俺がどう思っていたか分からないが、少なくとも心底ではもう覚悟を決めていたことだけは覚えている。

ただ、踏み込むだけの勇気が無かった故に、まだ決心がついていないように気持ち力をモフラージユしていたのだ。

そして、何かが背中を押してくれるのを待っていた。

しかし、これは悪いことではあるまい。裏切らなければ、問題ない。俺は、そう思ったし今でもこう思ってる。信頼ってやつだ。

「相談って何？」

数日の後、麻奈美と会う機会があったので、打ち明けてみた。

「なんか、音楽部に誘われたんだけどさ」

「へえ、相当暇そうにしてたから、良かったじゃない」

「ん、その反応からすると、そっちにもあるのか」

「あるよ。結構、大変みたい。楽器と違って、身体を使うものだからね」

「へえ……」

それでも、合唱という分野に関してやる気が失せるということとはなかった。

とある夕立の日、友人のコンクールを聴きに行ってから雨に降られて帰った後、興味本位でネットで合唱というものを調べてみた。中学の合唱祭でやっていたものとは、全く別物だったことが、ひどく印象に残ったものだった。特に、男声合唱なるものの力強さというものは、安物のヘッドホンが壊れるんじゃないかという位、凄まじいものだった。伍してみたい、という気が、いやおうなしに起こるものだった。

「合唱つてすげえ！」

と、その後に、麻奈美にメールを送った。

「私は吹奏楽の方が好きだけど、合唱も良いよね」

「何であんな響いてくるんだろうな」

「言葉で奏でてるからじゃない？」

そんな風に談義したりして、夜更かしをしていた。楽しい葛藤だった。これから長い旅行に行くような、そんな心地がしたのだ。

夏終わりがけのある日、俺は学校に赴いた。夏休み登校日含めて、通算五回目の登校だった。

教室内は、お盆の頃に比べたら随分がやがやとしていた。

なんといつても、あの清木まで居るのだ、それは俺にとって存外なことだった。

「今日はオフなんぞな」

不器用にペンキを塗りながら、清木はいつもの調子で言った。

俺は、淡い色に塗られていくその木材を繁々と見てばやく。

「しかし、見えそうにない場所にある支柱も、こんな丁寧にやらせるとはな……、相当完成度高いぜこりゃ」

「仕事がねえってサボるのが男だ、つつつて、こういうしょぼい仕事をさせるんさ」

清木はそれでも気だるそうな訳でもなく、体育の準備体操をする

ような面持ちで作業をしていた。こういうところにも、国橋の慎重さが表れている。小さな仕事をさせて士気を維持させ、いざ大きな作業が生じたときに手を貸してもらえようにするという、イレギュラーな要素でさえも、取りこぼさないようにする策なのだろう。

俺は、どんなしよばい仕事を請け負わされるのか、と思いながら国橋に話しかけた。

「あ、きてくれたんだ」

と、俺が来た時の常套句と共に、清木の手伝いという、『しよばい』仕事を任せられた。

「来たな」

「来たよ」

俺は清木の隣に座って、刷毛を手に取った。

「どうだい、調子は」

「どうもこうも、暑くて部活どころじゃねーよ」

清木は愚痴をたれた。

「熱中症が出ないのがおかしい位だぜ、今年の暑さは」

「大変だな」

「文化部のお前にや分からないだろうが……、って今はニートなんだっけか」

「ニートじゃないが、まあ暇してるよ」

てつきりその清木が塗っていた木材だけかと思っていたら、近くにすごい量があつて驚いた。テンションは右肩下がりで、それでも淡々と作業を続けていく。

ふと息をついて首を回したら、派手にゴキツといった。それを聞いた清木は愉快そうに言う。

「派手にいったな」

「一時間もやってりや首も固まるわ……」

俺はそういいながら伸びるついでに、まわりを見渡してみた。

迷路の原型のようなものが出来上がってきて、幾多もの死角ができていたものの、それでも、大海の気配というものが感じられなか

った。

あれから何度か学校に訪れていたものの、大海と会えたのはあの日一度きりだった。

「どうしたよ、そんなそわそわして」

「いや、別に」

なんとか感づかれないように、俺は早口に言うた作業に戻った。

清木は怪訝そうにじろじろ見てきたが、すぐに俺に倣う。

十八時を回る頃に、ようやく積み上げられた木材たちにペンキを塗り終えた。

「疲れたあ……、俺はもう帰るぞ」

「ああ、お疲れ」

清木は相変わらずのさっぱりさを遺憾なく発揮して、適当にクラスメイトに挨拶して教室から出て行った。

俺は、この日最大の伸びをして、思い切り体を鳴らした。

そして、次いで帰ろうかと鞆を取ったところで、教室の扉が開いた。

見ると、大海だった。

俺は教室内を見渡して、もう解散ムードになっているのを確認すると、鞆をもう一度置いてトイレに向かった。なんとなく、時間を稼いで機会を得られないものかと考えたのだった。

どうも運が良かったようで、手を洗って廊下に出たら、ばったりと大海に出くわした。

「よう」

「あ、早田君来てたんだ」

大海は心底驚いているようだった。

そのままトイレに駆け込んでいったので、俺は教室に戻って今度こそ鞆を手にとって、帰り支度を始めた。

そして、そのまま帰った。大海とは結局、その挨拶のみを交わしただけだった。

結局、二学期が始まるまで、俺はどうしようもないのだ。そのこ

とを考えると、大海と接することはあまり意味が無い。

だが、彼女が俺の人生を別の路線に切り替えてくれる、という根本的な事実は、ひどく感情的に俺を悶々とさせた。じれったかったのだ。

実際問題、中学の友人達の現在を見て、暇に溺れている我が身に耐えられなくなり、自分もあいつらみたいに青春したい、という気が起こるのはごく自然なことだと思う。特に俺の性分ではそうだ。

夏の終日、八月三十一日まで、ゼリーの様に半固体だった決心が、その日にはもう完全な固体になっていた。

麻奈美は、ただ「頑張つてね」とだけ言った。

俺は、その一言だけで満足だった。

ついでに、宿題も手伝ってくればよかったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566n/>

人生という名のギャルゲー

2010年10月8日14時19分発行